

吉野伊佐男



吉本興業株式会社
代表取締役会長

情と笑いの 仕事論

吉本興業会長の
山あり谷あり半生記



ヨシモトブックス

吉野伊佐男

吉本興業株式会社
代表取締役会長

情と笑いの 仕事論

吉本興業会長の
山あり谷あり半生記

情と笑いの仕事論

吉本興業会長の山あり谷あり半生記

2014年7月14日 初版発行

著者 吉野伊佐男

発行人 森山裕之

発行 ヨシモトブックス

〒160-0022
東京都新宿区新宿5-18-21
03-3209-8291

発売 株式会社ワニブックス

〒150-8482
東京都渋谷区恵比寿4-4-9 えびす大黒ビル
03-5449-2711

印刷・製本 シナノ書籍印刷株式会社

装丁 川名潤 (Gripaprice)
DTP 西本レイコ (ワイズアクト)

撮影 佐伯慎亮
編集 新井治

本書の無断複製（コピー）、転載は著作権法上の例外を除き禁じられています。
落丁本・乱丁本は株式会社ワニブックス営業部宛にお送りください。
送料弊社負担にてお取替え致します。

© 吉野伊佐男／吉本興業
ISBN978-4-8470-9182-7

プロローグ 「いちばんおもろない男」がトップになった 7

第1章

吉本興業・どん底時代

つぶれかけていた吉本への入社 22

東京にも進出していった戦前の吉本 26

ラジオとアメリカ文化に憧れた南大阪の少年 34

グリーで学んだ「メンタルハーモニー」 38

バイトを通じて知った「自分で稼ぐ」面白さ 40

どん底の吉本で「金勘定」に追われる 44

「仕事の適性」は周りが勝手に判断する 51

第2章

芸人と情を交わす

金を回収して初めて「仕事」になる 56

タレントの〴〵値段の決め方とは 61

第3章

テレビがもたらした黄金期

「タレントのバラ売り」から「番組まるごと制作」へ……………	65
横山やすし「給料差し押さえ事件」……………	69
Wヤング中田の失踪と自殺……………	72
「飲み仲間」林家小染の事故死……………	77
芸人との「情の交わり合い」……………	82
爆発的人気、笑福亭仁鶴の「スター伝説」……………	88
『ヤングタウン』とテレビ時代の寵児・桂三枝……………	92
ベテラン人生幸朗を輝かせたメディアの力……………	97
テレビとのパイプ築いた「師匠」中邨秀雄……………	101
怒濤の漫才ブーム到来……………	106
点滴打ってへり移動。ザ・ばんちと飛び回った日々……………	110
後悔が尽きないザ・ばんちへの思い……………	115
芸人とマネージャーのあるべき間合いとは……………	121
芸人の「魂」と、吉本の「ビジネス」と……………	126

吉本芸人を売り込む ―CM営業奮戦記

初のCM1000万円プレーヤーになったやすきよ……………132

仁鶴のボンカレーから始まった……………135

金鳥CMに見る、芸人の魅力の引き出し方……………139

さんまが実現、夢のCM1億円プレーヤー……………145

タレント争奪、お得意先の板挟みに……………150

吉本新喜劇「復活」CMの陰で……………153

ライバル2社のビールCMを同時に制作……………158

吉本興業の東京再上陸

NSC、半信半疑の船出……………164

ダウンタウン登場のインパクト……………171

テレビ界席巻——東京進出事始め……………177

吉野流接待術——ソフトをお金に換える快感……………186

第6章

吉本興業40歳定年説!?	192
個性の宝庫「犯罪者から政治家まで」	195
バブル絶頂、大阪花博の猛獣ショー	197
全国へ、海外へ。「総合エンターテインメント」へ足場築く	200

吉本興業が100年続いた理由

社長代行の日々	206
「メンタルハーモニー」の経営論	214
個人商店から「普通の会社」へ	218
地方から日本を元気にする「エリアプロジェクト」	226
100年変わらずにあるもの	230

特別対談

芸人と社員 それぞれから見た吉本興業

吉野伊佐男×六代桂文枝	236
-------------	-----

吉野伊佐男

吉本興業株式会社
代表取締役会長

情と笑いの
仕事論

吉本興業会長の
山あり谷あり半生記

プロローグ 「いちばんおもろない男」がトップになった 7

第1章

吉本興業・どん底時代

つぶれかけていた吉本への入社 22

東京にも進出していった戦前の吉本 26

ラジオとアメリカ文化に憧れた南大阪の少年 34

グリーで学んだ「メンタルハーモニー」 38

バイトを通じて知った「自分で稼ぐ」面白さ 40

どん底の吉本で「金勘定」に追われる 44

「仕事の適性」は周りが勝手に判断する 51

第2章

芸人と情を交わす

金を回収して初めて「仕事」になる 56

タレントの〴〵値段の決め方とは 61

第3章

テレビがもたらした黄金期

- 「タレントのバラ売り」から「番組まるごと制作」へ……………65
- 横山やすし「給料差し押さえ事件」……………69
- Wヤング中田の失踪と自殺……………72
- 「飲み仲間」林家小染の事故死……………77
- 芸人との「情の交わり合い」……………82
- 爆発的人気、笑福亭仁鶴の「スター伝説」……………88
- 『ヤングタウン』とテレビ時代の寵児・桂三枝……………92
- ベテラン人生幸朗を輝かせたメディアの力……………97
- テレビとのパイプ築いた「師匠」中邨秀雄……………101
- 怒濤の漫才ブーム到来……………106
- 点滴打ってへり移動。ザ・ばんちと飛び回った日々……………110
- 後悔が尽きないザ・ばんちへの思い……………115
- 芸人とマネージャーのあるべき間合いとは……………121
- 芸人の「魂」と、吉本の「ビジネス」と……………126

吉本芸人を売り込む ―CM営業奮戦記

初のCM1000万円プレーヤーになったやすきよ……………132

仁鶴のボンカレーから始まった……………135

金鳥CMに見る、芸人の魅力の引き出し方……………139

さんまが実現、夢のCM1億円プレーヤー……………145

タレント争奪、お得意先の板挟みに……………150

吉本新喜劇「復活」CMの陰で……………153

ライバル2社のビールCMを同時に制作……………158

吉本興業の東京再上陸

NSC、半信半疑の船出……………164

ダウンタウン登場のインパクト……………171

テレビ界席巻——東京進出事始め……………177

吉野流接待術——ソフトをお金に換える快感……………186

第6章

吉本興業40歳定年説!?	192
個性の宝庫「犯罪者から政治家まで」	195
バブル絶頂、大阪花博の猛獣ショー	197
全国へ、海外へ。「総合エンターテインメント」へ足場築く	200

吉本興業が100年続いた理由

社長代行の日々	206
「メンタルハーモニー」の経営論	214
個人商店から「普通の会社」へ	218
地方から日本を元気にする「エリアプロジェクト」	226
100年変わらずにあるもの	230

特別対談

芸人と社員 それぞれから見た吉本興業

吉野伊佐男×六代桂文枝	236
-------------	-----

インタビュー構成 〓 松本創

プロローグ

「いちばん

おもろくない男」が
トップになつた

吉本でいちばんおもろない男――。

僕、いつもそう言うて自己紹介するんです。いろんなパーティーや会合で挨拶や講演をさせてもらう機会があれば、話のはじめにね。もともとは、社長になって間もない頃やつたか、週刊誌がちよつと擲^や擲^りして書いてた言葉なんですけども、読んで腹が立つどころか、「ああ、そのとおりやなあ」と自分でも納得してしもて、そのうち、このフレーズが気に入ってきた。べつに、自虐ネタや謙遜で言うてるわけやなしに、ほんまのところそうなんです。

芸人に負けへんぐらい強烈な個性で次々とおもろいことを言えるわけでもなければ、それこそ週刊誌が喜びそうな派閥争いや出世競争をガンガン繰り広げてのし上がってきたわけでもない。かと言うて、プロデューサーやマネージャー、あるいは経営者という立場で積極的に表に出て、社内外に自分の名前や手腕を売り込んでいくような「自己プロデュース能力」に長けた人間でもありません。

世間の人たちから見れば、吉本興業といえは「ザ・芸能界」のど真ん中であって、そのトップともなれば、所属タレントを超越するぐらい個性的で、ギラギラした、インパクト

の強い人物やと思われるでしょう。たしかに、吉本の歴史を振り返れば、「ライオン」の異名で呼ばれたほどのカリスマ的存在で、中興の祖となった故・林正之助会長（創業者・吉本せいの弟）を筆頭に、そういうタイプのトップがおられたことも事実ですけども、僕自身はそういうイメージからはほど遠い。今の社長の大崎君のように、会社の「本流」を——つまり、主力商品である芸人やタレントを担当して、若い頃から彼らと一緒に過ごして、二人三脚で育て上げるようなマネージメント畑を——長く歩いてきたわけでもありませんね。

キャラクターのうえでも、キャリアのうえでも、「ザ・芸能界」みたいな色合いは薄いんです。週刊誌の記者どころか、自分でもこれでええんかなと、たまに思うぐらい。だから、会合やパーティーで初めて名刺を交わす人は、だいたいみんなびっくりしりますよ。「え、あなたが、あの吉本の会長なんですか……」みたいな、ちよっと拍子抜けした表情で。「どんなコワイ人かと思ったら」と直接言われたこともある（笑）。

いや、無理もないです。だってそれは、実際に社長をやるまで、僕自身が思ってたことですからね。僕みたいなタイプの人間に吉本のトップなんか務まらへん、自分には過ぎたるポジションやと、ずっと思ってた。だから、最初は社長になるのを固辞したぐらいです。でも、時のめぐり合わせというのか、いろんなことが重なって、思いもかけず重い仕事と責任を担うことになった。それから、もう10年近く——。

まずは、その話から始めましょうか。

社長になった時のことはよく覚えてます。僕が吉本興業に勤めてきた半世紀近い日々の中で、あれほどもぐるしく、いろんなことが一度に押し寄せてきた数日間はありませんからね。なにしろ、混乱の極みやった。

突然、自分に降りかかってきた事態への困惑。会社をなんとか守っていかなくんという責任感。何よりも、大きな重圧。社長になって晴れがましいとか、嬉しいとか、トップの椅子を楽しみたいとか、そういう感慨めいたものはこれっぽっちもありません。そんなことに浸ってる余裕なんか到底なかった。目の前の問題を取りあえず片付けながら、徐々に態勢を整えていくしかない。それだけを考えて、まあ必死でしたよ。

発端は、前社長の急逝だった。吉本興業「創業家」の系譜を背負った「総領」として、長期体制を敷くと周囲から目されていた林裕章ひろあきは、社長就任からわずか4年あまりで病に倒れ、療養中に会長へ退いた。とはいえ、代表権は保持しており、社長は空席のまま。病を乗り越ければ、経営の第一線に復帰という道もあった。しかし、容体は徐々に悪化してゆき、会長就任から半年も経たず、彼は唐突に逝った。62歳だった。

2005年1月3日の夜のことだ。

大阪市内のホテルで、常務（当時）の大崎洋らと打ち合わせをしていた吉野伊佐男は、